



TITLE:

# 計算幾何学について(グラフ理論とその応用)

AUTHOR(S):

浅野, 孝夫

---

CITATION:

浅野, 孝夫. 計算幾何学について(グラフ理論とその応用). 数理解析研究所講究録 1982, 471: 10-32

ISSUE DATE:

1982-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/103248>

RIGHT:

## 計算幾何学について

東大 工学部 浅野 考夫

ASANO Takao

### 1. まえがき

計算幾何学 (computational geometry) は, 幾何学 (geometry) に計算量 (computational complexity) の概念を導入したものであり, 幾何学的な問題を計算機で効率的に処理することを目的としている。幾何学的な問題に対して, 問題の規模が小さければ, 人間は目の働きで直観的に判断できすぐに解を求めることが可能であるが, 計算機はこの種的能力が乏しかった。しかし, 近年の目覚しい計算機科学の発展により, 計算幾何学の研究も進み, 多くの幾何学上の問題が効率的に処理されるようになってきた。

本文では, 計算幾何学において最も重要な4つの問題:

(i) 重なり問題; (ii) 凸包問題; (iii) 点位置決定問題; (iv) Voronoi 線図; に焦点を当てて, 最近の研究とその応用面について紹介する。

## 2. 重なり問題

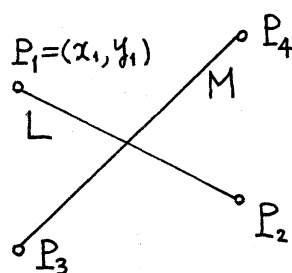
重なり問題とは、図形が与えられたとき、互いに重なる（交わる）図形が存在するかどうかを判定したり、列挙したり、共通部分を求めたりする問題である。

### 2.1 2個の線分の交差判定

平面上に与えられた2個の線分  $L=(P_1, P_2)$ ,  $M=(P_3, P_4)$  ( $P_i=(x_i, y_i)$ ) が交差するための必要十分条件は

$$\begin{vmatrix} x_1 & y_1 & 1 \\ x_2 & y_2 & 1 \\ x_3 & y_3 & 1 \end{vmatrix} \cdot \begin{vmatrix} x_1 & y_1 & 1 \\ x_2 & y_2 & 1 \\ x_4 & y_4 & 1 \end{vmatrix} < 0$$

$$\begin{vmatrix} x_3 & y_3 & 1 \\ x_4 & y_4 & 1 \\ x_1 & y_1 & 1 \end{vmatrix} \cdot \begin{vmatrix} x_3 & y_3 & 1 \\ x_4 & y_4 & 1 \\ x_2 & y_2 & 1 \end{vmatrix} < 0$$



であることが容易に示される。従って、8回の乗算で2つの線分の交差を判定できる。更に、少し工夫すれば6回の乗算で可能である。吉田[1982]は、実は5回の乗算が必要でかつ十分であることを示した。以下、5回の乗算で十分であることを説明する。

$P_1$ と $P_2$ を通る直線を $L'$ ,  $P_3$ と $P_4$ を通る直線を $M'$ とし、 $L'$ と $M'$ の交点を $Q=(x, y)$ とする。直線 $L'$ ,  $M'$ の方程式は

$$L' = tP_2 + (1-t)P_1, \quad M' = sP_4 + (1-s)P_3$$

と表せる。Qを表わす,  $(t, s)$ を求めるには

$$tP_2 + (1-t)P_1 = sP_4 + (1-s)P_3$$

を解けばよい。従って,

$$t = \Delta_t / \Delta, \quad s = \Delta_s / \Delta$$

である。ここで,

$$\Delta = \begin{vmatrix} x_2 - x_1 & y_2 - y_1 \\ x_3 - x_4 & y_3 - y_4 \end{vmatrix} \quad \Delta_t = \begin{vmatrix} x_3 - x_1 & y_3 - y_1 \\ x_3 - x_4 & y_3 - y_4 \end{vmatrix} \quad \Delta_s = \begin{vmatrix} x_2 - x_1 & y_2 - y_1 \\ x_3 - x_1 & y_3 - y_1 \end{vmatrix}$$

である。Qが線分L, Mにあるための必要十分条件は,

$$0 \leq t \leq 1, \quad 0 \leq s \leq 1$$

であるので,  $\Delta, \Delta_t, \Delta_s$  が求まっていれば, 加減算と符号の判定だけで, 線分L, Mが交差するかどうかを判定できる。

$\Delta, \Delta_t, \Delta_s$  が5回の乗算で求まることを示すには

$$\begin{pmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -b_3 \\ a_3 \end{pmatrix}, \quad a_1 b_2 - a_2 b_1$$

が5回の乗算で計算できることを示せばよい。実際,

$$a_1 = x_2 - x_1, \quad a_2 = x_3 - x_4, \quad a_3 = x_3 - x_1$$

$$b_1 = y_2 - y_1, \quad b_2 = y_3 - y_4, \quad b_3 = y_3 - y_1$$

とおけば,  $\Delta, \Delta_t, \Delta_s$  の計算になっている。

$$A_1 = (a_1 + a_3)(b_2 - b_3), \quad A_2 = (a_2 - a_3)(b_1 + b_3)$$

$$A_3 = a_3(b_1 - (b_2 - b_3)), \quad A_4 = a_1 b_2, \quad A_5 = a_2 b_1$$

を用いれば,

$$a_1 b_2 - a_2 b_1 = A_4 - A_5, \quad -a_1 b_3 + a_3 b_1 = A_1 + A_3 - A_4$$

$$-a_2 b_3 + a_3 b_2 = -A_2 - A_3 + A_5$$

である [吉田 (1982)].

## 2.2 $n$ 個の線分の重なり判定・列挙

平面上に、与えられた  $n$  個の線分に対して、互いに交差する線分対が存在するかどうかは、素朴な算法で  $O(n^2)$  の時間で判定できる。Shamos と Hoey は算法を工夫して  $O(n \log n)$  の時間で判定できることを示した [Shamos & Hoey (1975)]. 更に、重なり判定問題の下限が  $\Omega(n \log n)$  であることを示し、彼らの算法が最適であることを示した。また互いに交差する線分対の個数が  $k$  ならば、 $O(n \log n + k)$  の列挙算法があるのではないかと提案した。Bentley と Ottmann [1979] は Shamos-Hoey の算法を少し改良して、 $O(n \log n + k \log n)$  の列挙算法を示した。以下、Shamos-Hoey の算法を紹介する。

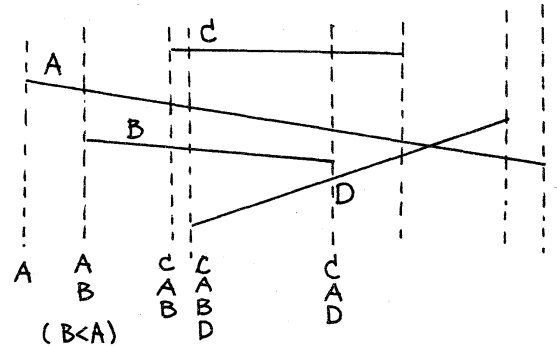
基本的なアイデアは次の 3 点である。

- (1)  $n$  個の線分の端点を通り  $y$  軸に平行な直線で平面を  $2n + 1$  個の領域、スラブ、に分割する。
- (2)  $y$  軸に平行な直線  $x = u$  と交わる線分に対して、その交点の位置の上下関係で順序 " $\leq_u$ " を導入する。
- (3) 2 つの線分が交差するならば、ある線分の端点を通る  $y$  軸に平行な直線における順序でその 2 つの線分は連続して

いる。

### Shamos-Hoey の重なり算法

- 1°  $n$  個の線分の端点を  
 $(x, y)$  に関する辞書  
 式順序で小さい順に



とれるように priority queue  $Q$  に入れる。線分の上下関係を表現する  $T$  を空にする。

- 2°  $Q$  が空になるまで 3°-6° を繰り返す。
- 3°  $Q$  から先頭の端点  $u$  を取り,  $u$  を端点とする線分を  $S$  とおく。
- 4°  $u$  が線分  $S$  の左端点ならば 5° を実行し, 右端点ならば 6° を実行する。
- 5°  $T$  に  $S$  を挿入する。  $T$  で  $S$  に連続する 2 つの線分  $A, B$  に対して,  $A$  と  $S$  あるいは  $B$  と  $S$  が交差すれば, "yes" とし,  $Q$  を空にする。3° に戻る。
- 6°  $T$  で  $S$  に連続する 2 つの線分  $A, B$  に対して,  $A$  と  $B$  が交差すれば, "yes" と出し  $Q$  を空にする。  $T$  から  $S$  を削除して 3° に戻る。

上図にこの算法を適用すれば線分  $B$  の右端点で  $A$  と  $D$  が交差することを発見する。  $T$  はバランスのとれた木構造のデータ構造を用いる。 3°-6° は 1 回当たり  $O(\log n)$  で可能である

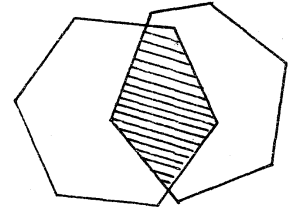
ので、全体の手間は  $O(n \log n)$  である。

Bentley-Ottmann の算法は交差する線分対が見つかった時点で算法が終了するのではなく、検出された交点も  $Q$  に挿入して進行する。y 軸に平行な直線  $x=u$  の走査で  $u$  が線分の端点ならば Shamos-Hoey と同様であるが、 $u$  がある線分対  $A, B$  の交点に対応するときには、 $x=u$  の走査の前後で  $A, B$  の順序を交換する。このようにして、交差する線分対をすべて列挙する。なお、 $k = \Omega(n^2)$  のときには、Bentley-Ottmann の算法は  $O(n^2 \log n)$  となり、素朴な算法  $O(n^2)$  より効率的でない。

### 2.3 応用例

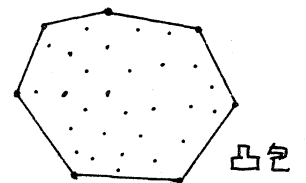
- (1) 与えられた  $n$  角形  $P = a_0 a_1 \dots a_{n-1} a_0$  が単純であるかどうか、すなわち、交差する2辺  $a_i a_{i+1}, a_j a_{j+1}$  ( $j \neq i, i-1, i+1$ ) が存在するかどうかを  $O(n \log n)$  で判定できる [Shamos (1978)]。
- (2) 単純な2つの  $n$  角形  $P, Q$  が重なるかどうかを  $O(n \log n)$  で判定できる [Shamos (1978)]。
- (3) 平面上で描れた直線グラフが端点以外で交差するかどうかを  $O(n \log n)$  で判定できる [Shamos (1978)] ( $n$  は枝数)。
- (4)  $n$  個の単純な  $k$  角形に対して、重なる  $k$  角形の対が存在するかどうか  $O(nk \log nk)$  で判定できる (凸角形ならば  $O(nk + n \log n \log k)$ ) [Shamos (1978)]。

- (5)  $n$  個の長方形の重なり判定は  $O(n \log n)$  で, 重なり列挙は  $O(n \log n + k \log n)$  で求まる [Bentley & Ottmann (1979)].
- (6) 2 つの凸  $m$  角形と凸  $n$  角形の重なりは  $O(m+n)$  で求まる [Shamos (1978)].
- (7)  $n$  個の半平面の共通部分は  $O(n \log n)$  で求まる [Shamos (1978)].
- (8)  $n$  個の正方形の交グラフ (intersection graph) の連結成分は  $O(n \log n)$  で求まる [Imai (1981)].
- (9)  $n$  個の長方形の交グラフの連結成分と最大フリークは  $O(n \log n)$  で求まる [今井 & 浅野 (1981), Imai & Asano (1981)].
- (10)  $n$  個の円の交グラフの連結成分は  $O(n \log n)$  で求まる [今井, 伊理 & 室田 (1981)].



### 3. 凸包問題

$k$  次元の  $n$  個の点に対して, それらの点すべてを内部に含む最小の凸多面体を凸包 (convex hull) という。Graham (1972) は  $k=2$  の場合  $O(n \log n)$  で凸包を求められることを示した。以来, 凸包問題は活発に研究され,  $k=2$  に対しては,  $O(mn)$  ( $m$  は凸包の頂点数) の Jarvis の算法 [1973], 最悪では  $O(n \log n)$  であるが, 平均的には  $O(n)$  の Shamos [1978]





の算法が得られた。Graham の算法は凸包の内部に 1 点  $O$  を固定し,  $O$  を原点とする  $n$  個の点の偏角を求め, 偏角の小さい順に  $z_1, z_2, \dots, z_n$  と並べ,  $\angle z_i z_{i+1} z_{i+2}$  が  $180^\circ$  未満かどうかを調べながら凸包を構成する。Shamos の算法は,  $n$  個の点を勝手に (random に) 2 つに分け (大きさは  $\lceil n/2 \rceil$  と  $\lfloor n/2 \rfloor$ ), それらについての凸包を用いて全体の凸包を構成するもので分割統治法 (divide and conquer) を用いている。Jarvis の算法は凸包の左側外部に 1 点  $O$  を選び,  $O$  を原点として偏角  $\theta$  の最も小さい点を  $z_0$  とする ( $-90^\circ < \theta < 90^\circ$ )。以下,  $z_i$  を原点として偏角  $\theta$  ( $0^\circ < \theta < 180^\circ$ ) の最小の点を  $z_{i+1}$  と定め,  $z_0$  になるまで繰り返すものである。

2次元の  $n$  個の点に対する凸包を (辺まで) 求める問題の下限は  $\Omega(n \log n)$  である [Shamos (1978)]。これは, 凸包問題が解ければ直ちにソーティングの問題が解けるからである。実際,  $n$  個の正数  $x_1, x_2, \dots, x_n$  に対して,  $z_i = (x_i, x_i^2)$  ( $i = 1, \dots, n$ ) を対応させて,  $z'_1, z'_2, \dots, z'_n, z'_1$  という形で凸包が求まれば,  $x'_1 \leq x'_2 \leq \dots \leq x'_n$  が得られる ( $x'_1 \leq x_i : i = 2, \dots, n$ )。これに対して, 凸包の頂点集合を求める問題を凸包問題と解釈する立場もある。Yao [1981] はこの凸包問題に対して,  $z_i = (x_i, y_i)$  ( $1 \leq i \leq n$ ) ならば,  $x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n$  の 2 次以下の多項式  $f(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n)$  の計算とその値が正, 負また

は 0 であるかにより分岐することのみを許した "quadratic decision tree model" のもとでは、下限が  $\Omega(n \log n)$  であることを示した。一方、van Ende Boas は線形関数  $f(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n)$  の計算とその値の正、負、0 による分岐の "linear decision tree model" でも凸包問題の下限が  $\Omega(n \log n)$  であると報告した。しかし、後に、"linear decision tree model" では凸包問題を解くことはできないことが示された [Avis (1980), Jaromczyk (1981)]。  $x_i, y_i$  がすべて整数ならば、"linear decision tree model" のもとでも凸包問題が解けて、下限は  $\Omega(n \log n)$  である [Avis (1982)] が、"quadratic decision tree model" に対してはまだ結果が得られていない。

単純な  $n$  角形  $z_1 z_2 \dots z_n z_1$  に対する凸包問題は初め  $O(n)$  で解けると報告された [Sklansky (1972)] が、Bykat [1978] は誤りのあることを指摘した。現在は  $O(n)$  の算法が与えられている [MaCallum & Avis (1979)]。

3次元以上の空間における凸包問題に対しては、Appel & Will (1976), Preparata & Hong (1977), Toussaint, Akl & Devroye (1978), Chand & Kapur (1970) を参照されたい。4次元

の場合、 $n$  個の点で定まる凸包は  $\Omega(n^2)$  の頂点と辺をもつので凸包問題の下限は  $\Omega(n^2)$  である [Grünbaum (1967), Brown (1978)]。

最後に2つの凸包の共通接線を求める算法を紹介する。

2つの凸包の外接線を求める算法 [Shamos (1978)]

1° 凸 $m$ 角形 $P$ の内部に

1点 $z_0$ を固定する。

2°  $z_0$ が凸 $n$ 角形 $Q$ の内部にある

かどうかを判定する。

3°  $z_0$ が $Q$ の内部にあれば4°を実行し、外部にあるときには5°を実行する。

4°  $P$ と $Q$ のそれぞれの頂点は $z_0$ の回りで偏角順に並んでいる。 $P$ と $Q$ の全体の頂点を $z_0$ の回りで偏角順になるように併合してリスト $R$ をつくる。6°へ行く。

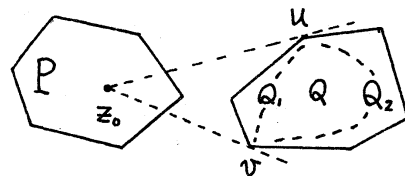
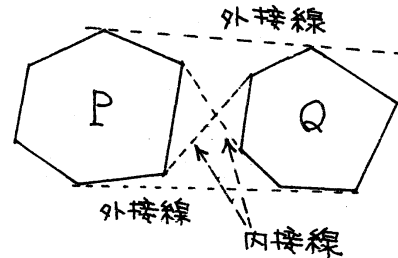
5°  $z_0$ から $Q$ に接線を引く。

接点を $u$ ,  $v$ とする。 $Q$ を

$u$ と $v$ を結ぶ2つの頂点列 $Q_1, Q_2$

とみなす。 $Q_1$ を時計回り,  $Q_2$ を反時計回りの順に考えれば,  $Q_1$ と $Q_2$ の頂点列はそれぞれ $z_0$ の回りで偏角順に並んでいる。3つの $z_0$ の回りで偏角順に並んだ頂点列 $P, Q_1, Q_2$ を併合して,  $z_0$ の回りで偏角順に並んだリスト $R$ をつくる。6°へ行く。

6°  $R$ に関して, Graham [1972]の凸包算法を適用して凸包を求める。新しい2つの辺が外接線である。

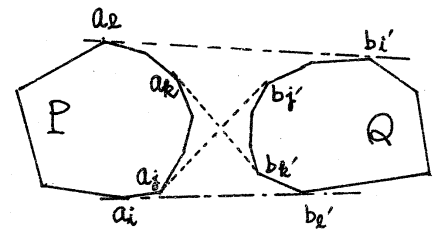


この算法の手間は  $O(m+n)$  である。Graham の算法のソーティングの部分は必要としないからである。

これに対して、2つの凸多角形の内接線を求める問題は本質的には外接線を求める問題に等価である。

### 2つの凸包の内接線を求める算法

- 1° 上記の外接線を求める算法を用いて、凸  $m$  角形  $P$  と凸  $n$  角形  $Q$  の共通外接線を求める。それを、 $a_i b_{e'}$ ,  $a_e b_{i'}$  とおく。新しい凸包の内部に含まれる  $P$  の部分を  $a_i a_{i+1} \cdots a_e$  とし、 $Q$  の部分を  $b_{i'} b_{i'+1} \cdots b_{e'}$  とおく。



直線  $a_j b_{j'}$ ,  $a_k b_{k'}$  が内接線

いずれも反時計回りの順である。

- 2°  $a_j$  を求める。求め方は、直線  $a_i a_{i+1}$  と交差する辺を辺  $b_{e'}$  から、辺  $b_{e'-1} b_{e'-2}$ ,  $b_{e'-2} b_{e'-3} \cdots$  と進んで見つける。初めて交差する辺を  $b_{e_1} b_{e_1+1}$  とおく。辺  $b_{i'-1} b_{i'}$  まで調べても交差する辺が見つからなかった場合は  $a_j = a_i$  とおく。次に直線  $a_{i+1} a_{i+2}$  と交差する辺を辺  $b_{e_1} b_{e_1+1}$  から出発して見つける。以下これを繰り返して、直線  $a_{i+p} a_{i+p+1}$  が  $Q$  の  $b_{i'} b_{i'+1} \cdots b_{e'}$  の部分と交わらなくなるまで実行する。このとき  $j = i+p$  である。
- 3° 同様にして、 $a_k$ ,  $b_{j'}$ ,  $b_{k'}$  を求める。

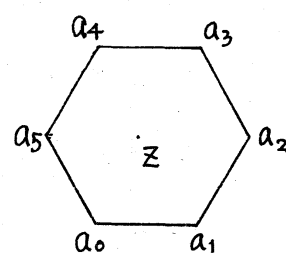
この算法の手間も  $O(m+n)$  である。一般に2つの凸多角形の内接線が存在するならば、外接線も容易に求められる。

#### 4. 点位置決定問題

日本地図が与えられているとき、〇〇市は何県に属するかというような質問に答えるのを点位置決定 (point location) という。この種の質問 (query) は地理的情報データベース等で頻繁に起こる。質問が同一の地図に対して何度も起こるので、後から起こる質問に備えて地図表現のデータ構造などに適当に前処理を施す対策が取られている。この時には、前処理に要する計算時間、記憶領域と質問1回当たりの探索時間の3つ手間を総合的に評価する必要がある。この節では、多角形と平面描画グラフの点位置決定算法を紹介する。

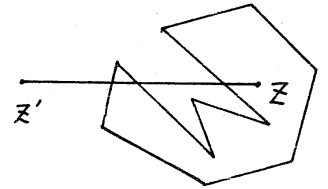
##### 4.1 多角形に対する点位置決定算法

単純な多角形  $P = a_0 a_1 \cdots a_{n-1} a_0$  (反時計回り) に対して、点  $z$  が与えられたとき、 $z$  が  $P$  の内部にあるかどうかを判定する



問題を考える。  $P$  が凸  $n$  角形ならば、  $P$  の各辺  $\overrightarrow{a_i a_{i+1}}$  に対して点  $z$  が左側にあるかどうかを判定し、すべての辺の左側にあるとき  $z$  は  $P$  の内部にあることがわかる。そうでないときには  $z$  は  $P$  の外部にある。この手間は  $O(n)$  である。

$P$  が凸多角形でない場合には,  $P$  の左側外部に 1 点  $z'=(x', y')$  を取る。ただし,  $z=(x, y)$  かつ  $y'=y$  とする。 $z, z'$  を結ぶ線分  $L(z, z')$  と  $P$  の各辺が交差するかどうかを判定し, 交差する辺の個数が奇数ならば,  $z$  は  $P$  の内部にあり, 偶数ならば外部にある。この算法の手間も  $O(n)$  であるが凸多角形の算法の 2 倍くらいの時間がかかる。



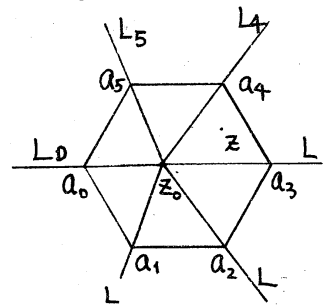
次に前処理を施す算法について述べる。以下の算法は凸  $n$  角形に対して, 前処理の計算時間が  $O(n)$ , 記憶領域が  $O(n)$ , 1 回当たりの探索時間が  $O(\log n)$  のものである。

凸多角形の点位置算法 [Shamos & Hoey (1975)]

1° 凸多角形  $P=a_0 \cdots a_{n-1}a_0$  の内部に 1 点  $z_0$  を固定する。

2° 点  $z_0$  と頂点  $a_i$  ( $0 \leq i \leq n-1$ ) を通る半直線を  $L_i$  とする。

3° 半頂角  $\angle a_{i-1}z_0a_i$  が効率的に探索できるように,  $\{L_i\}$  を適当なデータ構造で表現する。(以上, 前処理)



### 探索

1° 点  $z$  が与えられたら,  $\{L_i\}$  を二分探索し,  $z$  が属する半頂角 ( $L_i$  と  $L_{i+1}$  で囲まれた領域) を見つける。

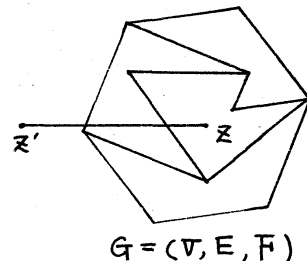
2° 点  $z$  が線分  $\overline{a_i a_{i+1}}$  の左側にあれば,  $z$  は  $P$  の内部にあり,

右側にあれば,  $z$  は  $P$  の外部にある。

この算法は凸でない多角形には適用できない。

#### 4.2 平面描画グラフに対する点位置決定算法

平面上に直線で描かれた平面グラフ  $G=(V, E, F)$  に対して, 点  $z$  が与えられたとき,  $z$  を内部に含む面  $f \in F$  を求める算法を紹介する。素朴な算法は, すべての面  $f \in F$  に対して  $f$  が点  $z$  を含むかどうかを判定する (一般の多角形に対する点位置決定算法を用いて)。計算の手間は  $O(\sum_{f \in F} |\Delta f|) = O(2|E|) = O(n)$  である。これに対して,  $z=(x, y)$  のとき,  $G$  の外面上に 1 点  $z'=(x', y')$  を  $x' < x, y'=y$  となるように選び, 線分  $L(z, z')$  と交わる辺をもつ面  $f \in F$  についてのみ,  $z$  が  $f$  に含まれるかどうかを判定する方法も考えられる。この方法はかなり効率的であると思われる。



$G=(V, E, F)$

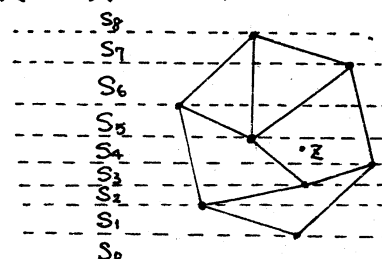
次に前処理を施す算法を述べる。  
提案された算法の性能評価である。

Shamos & Hoey (1975) の算法は平面グラフ  $G$  の各点を通り  $x$  軸に平行な直線で

平面を  $n+1$  個の領域, スラブ (slab) に分割

する。各スラブ内に  $G$  の点は存在しないので, スラブで切断される  $G$  の辺はそのスラブ内で交差しないので順序を導入で

次の表はこれまでに



算法	探索時間	記憶領域	前処理時間
Shamos & Hoey (1975)	$O(\log n)$	$O(n^2)$	$O(n^2)$
Lee & Preparata (1977)	$O(\log^2 n)$	$O(n)$	$O(n \log n)$
Lipton & Tarjan (1977)	$O(\log n)$	$O(n)$	$O(n \log n)$
Preparata (1981)	$O(\log n)$	$O(n \log n)$	$O(n \log n)$
Kirkpatrick (1981)	$O(\log n)$	$O(n)$	$O(n \log n)$

きる。スラブ間の順序を表現するデータ構造  $T_S$  と各スラブ  $S_i$  に含まれる辺の順序を表現するデータ構造  $T_i$  ( $1 \leq i \leq n-1$ ) を用意する。それらは2分探索が効率的に実行可能なものとする。点  $x$  が与えられたとき、探索はまず  $T_S$  を用いて  $x$  の属するスラブ  $S_i$  を求め、次に  $S_i$  のどの辺で囲まれる領域に  $x$  が属するかを  $T_i$  を用いて判定する。探索は  $O(\log n)$  の手間で可能であるが、記憶領域が最悪の場合  $\Omega(n^2)$  必要である。スラブの考え方を生かして、算法を改良したものが Lee & Preparata (1977) と Preparata (1981) の算法である。Lipton & Tarjan (1977) の算法は平面グラフの分離定理 (Separator Theorem) を利用したものである。一方、Kirkpatrick (1981) の算法は、平面グラフの面による分割を階層的にとらえ、分割数の小さい分割で点  $x$  の属する面  $f$  を決定し、次に分割数の小さい分割では  $f$  と重なる面についてのみ  $x$  が内部にあるかどうかを判定するものであ



る。この算法は非常に華麗で、証明法は Chiba, Nishizeki & Saito (1981) の平面グラフの線形時間 5 色算法の証明法と共通点があり、いずれも問題の規模を  $1/c$  ( $c$ : 定数) にするのに  $O(n)$  できその解を用いて最初の問題を解くのも  $O(n)$  できることを示し、 $T(n) \leq T(n/c) + c'n$  ( $c > 1$ ,  $c'$ : 定数) を解いて  $T(n) = O(n)$  を示している。

上記の算法で、Lipton & Tarjan と Kirkpatrick の算法はともに最適であるが、Lipton & Tarjan の算法は非常に複雑でありとても実用的でなく、Kirkpatrick の算法は明快だが比例係数が大きくて実用性には問題がありそう。

## 5. Voronoi 線図

平面上の  $n$  個の点  $z_i = (x_i, y_i)$  ( $i=1, 2, \dots, n$ ) に対して、点  $z_i$  からの距離が他のどの  $z_j$  からの距離よりも小さいような点の集合を Voronoi 多角形  $V(z_i)$  という。

すなわち、

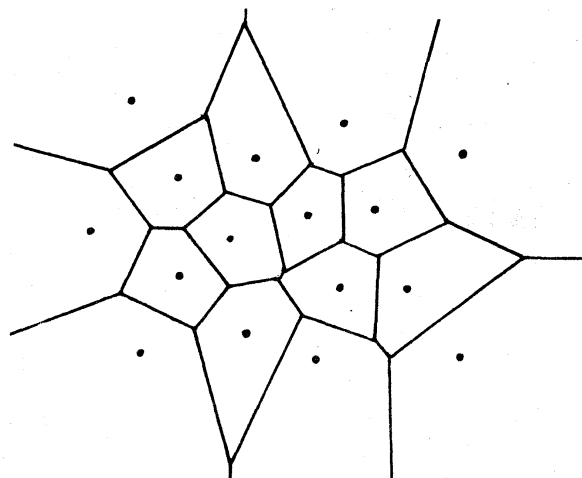
$$V(z_i) = \bigcap_{j=1}^n \{z \mid d(z, z_i) \leq d(z, z_j)\}$$

である。

$$d(z, z_i) = \sqrt{(x-x_i)^2 + (y-y_i)^2}$$

のときには、Shamos & Hoey (1975)

により  $O(n \log n)$  で  $n$  個の点



Voronoi 線図

の Voronoi 多角形  $\{V(z_i)\}$  が求められることが示された。Voronoi 多角形で分割された平面図形を Voronoi 線図 (Voronoi diagram) という。一旦, Voronoi 線図が求まれば次の問題が容易に解ける [Shamos & Hoey (1975)]。 (5) を除いて手間はすべて  $O(n)$ 。

(1)  $n$  個の各点に対して最も近い点全部。

(2)  $n$  個の点を結ぶ長さ最小の木。

(3)  $n$  個の点の凸包。

(4)  $n$  個のどの点も内部に含まない最大の円 (円の中心は  $n$  個の点の凸包の内部に存在するものとする)。

(5) 新しい点  $z$  に最も近い点 (Voronoi 線図を平面グラフと考えれば, 点位置決定問題に一致する)。  $O(n \log n)$  の前処理を施せば  $O(\log n)$  で求まる。

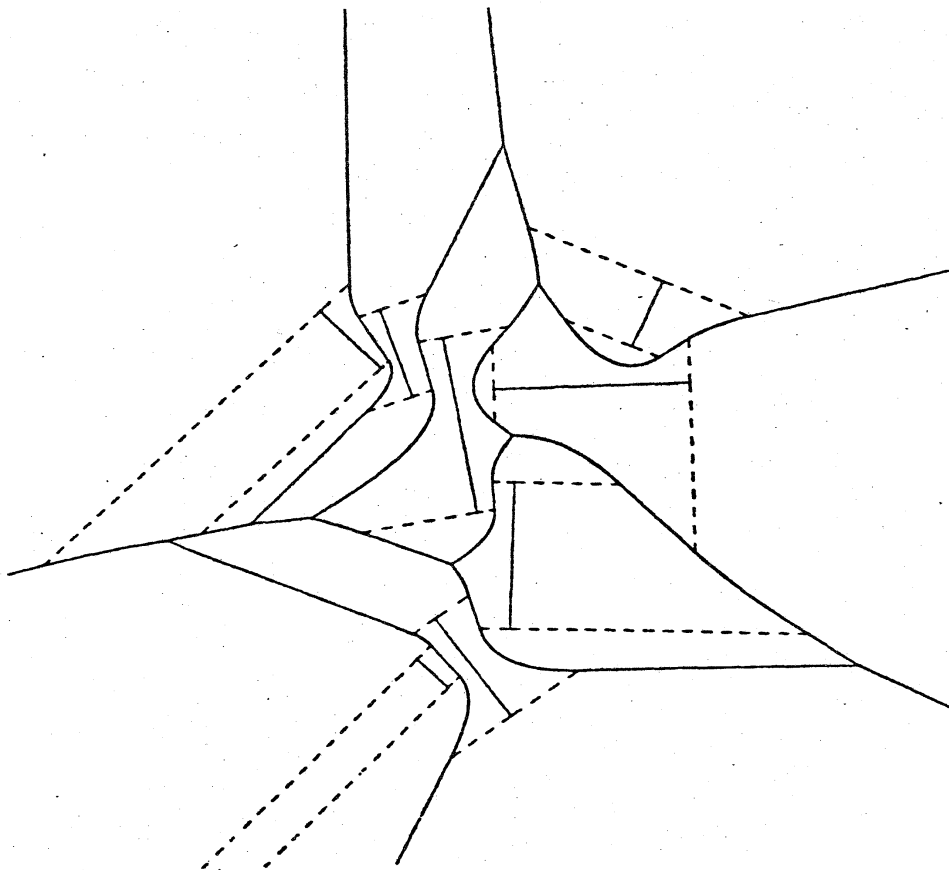
実用的な算法・プログラムも考案されている [Horspool (1979), 大屋 & 室田 (1982)]。特に, 大屋, 伊理 & 室田 (1982) はほぼ平均的に  $O(n)$  で Voronoi 線図が求まることを実証している。

距離関数  $d(\cdot, \cdot)$  を適当に選ぶことにより, 違った形の Voronoi 線図が得られる。Lee (1980), Lee & Wong (1981) は  $L_p$ -距離のもとでの Voronoi 線図を  $O(n \log n)$  で求めている。今井, 伊理 & 室田 (1981) は  $d(z, z_i) = (x - x_i)^2 + (y - y_i)^2 - r_i^2$  を採用して, Lagerre 幾何の Voronoi 線図を  $O(n \log n)$  で求めている。なお  $d(\cdot, \cdot) < 0$  の場合も認めていることに注意されたい。Lagerre 幾何の Voronoi

線図は  $n$  個の円に関連した問題を取り扱うのに非常に有用である。

3次元以上の空間における Voronoi 線図も同様に定義でき、効率的な算法も提案されている [Avis & Bhattacharya (1982)]。

一方、線分に関する Voronoi 線図も定義され、Lee & Drysdale II (1981) により  $O(n \log^2 n)$  の算法が提案され、黒田 (1982) は実際にプログラミングし、その算法を評価した。下図は黒田による線分の Voronoi 線図の出力例である。



線分の Voronoi 線図

## 6. むすび

計算幾何学のパターン認識への応用については Toussaint (1980), (1982) を参照されたい。地理情報処理への応用については, 伊理, 浅野 & 室田 (1981), 伊理 (1981), 伊理 (1982) を参照されたい。

謝辞 日頃より暖かい御指導を賜わっている東京大学工学部伊理正夫教授に感謝致します。多くの事を教えて頂きました伊理研究室の皆様にも感謝致します。本研究の一部は文部省科学研究費補助金：奨励研究 (A) 57750285 (昭57) の援助のもとで行なわれたものである。

## 文献

- A. Appel and P.M. Will (1976), Determining the three-dimensional convex hull of a polygon, IBM J. Res. Develop., 590-601.
- D. Avis (1980), Comments on a lower bound for a convex hull determination, Information Processing Letters, 11, 3, 126.
- D. Avis (1982), On the complexity of finding the convex hull of a set of points, Discrete Applied Math., 4, 81-86.
- D. Avis and B.K. Bhattacharya (1982), Algorithms for computing d-dimensional Voronoi diagrams and their duals, McGill Univ.

Technical Report, SOCS-82.5.

J.L. Bentley and T.A. Ottmann (1979), Algorithms for reporting and counting geometric intersections, IEEE Trans. Computers, C-28, 9, 643-647.

K.Q. Brown (1978), Voronoi diagrams from convex hulls, Information Processing Letters, 9, 5, 223-228.

A. Bykat (1978), Convex hull of a finite set of points in two dimensions, Information Processing Letters, 7, 6, 296-298.

D.R. Chand and S.S. Kapur (1970), An algorithm for convex polytopes, J. of ACM, 17, 1, 78-86.

N. Chiba, T. Nishizeki and N. Saito (1981), A linear 5-coloring algorithm of planar graphs, J. of Algorithms, 2, 317-327.

R.L. Graham (1972), An efficient algorithm for determining the convex hull of a finite planar set, Information Processing Letters, 1, 132-133.

B. Grünbaum (1967), Convex Polytopes, Wiley Interscience, New York.

R.N. Horspool (1979), Constructing the Voronoi diagrams in the plane, McGill University Technical Report, SOCS-79.12.

H. Imai (1981), Finding connected components of an intersection graph of squares in the Euclidean plane, Information Processing Letters, to appear.

今井, 浅野 (1981), 長方形の交グラフの連結成分を求める算

法, 日本 OR 学会 1981 年度秋季研究発表会 アブストラクト集, E-1-6, 118-119.

H. Imai and T. Asano (1981), Finding the connected components and a maximum clique of an intersection graph of rectangles in the plane, J. of Algorithms, to appear.

今井, 伊理, 室田 (1981), Voronoi Diagram の一般化, 日本 OR 学会 1981 年度秋季研究発表会 アブストラクト集, E-1-5, 116-117.

伊理 (1981), ネットワークにおける 算法とデータ構造, IBM 第2回 地域計画と地域データベース・シンポジウム.

伊理 (1982), 地理情報アルゴリズム, 日本 OR 学会 報文集.

伊理, 浅野, 室田 (1981), 地理情報処理について, 日本 OR 学会 1981 年度秋季研究発表会 アブストラクト集, E-1-4, 114-115.

R.A. Jarvis (1973), On the identification of the convex hull of a finite set of points in the plane, Information Processing Letters, 2, 18-21.

J.W. Jaromczyk (1981), Linear decision tree are too weak for convex hull problem, Information Processing Letters, 12, 3, 138-141.

D. Kirkpatrick (1981), Optimal search in the planar subdivisions, Univ. of British Columbia, Technical Report, 81-13.

黒田 (1982), 一般化ボロノイダイアグラムの構成算法の研究, 東京大学工学部計数工学科卒業論文.

D.T. Lee (1980), Two-dimensional Voronoi diagrams in the  $L_p$ -metric,

J. of ACM, 27, 4, 604-618.

D.T. Lee and R.L. Drysdale, III (1981), Generalization of Voronoi diagrams in the plane, SIAM J. on Computing, 10, 1, 73-87.

D.T. Lee and F.P. Preparata (1977), Location of a point in a planar subdivision and its applications, SIAM J. on Computing, 6, 3, 594-606.

D.T. Lee and C.K. Wong (1981), Voronoi diagrams in  $L_1$ -( $L_\infty$ ) metrics with 2-dimensional storage applications, SIAM J. on Computing, 9, 1, 200-211.

R.J. Lipton and R.E. Tarjan (1977), Applications of planar separator theorem, Proc. 18th Annual IEEE Sympo. Foundations of Computer Science, 162-170.

D. McCallum and D. Avis (1979), A linear algorithm for finding the convex hull of a simple polygon, Information Processing Letters, 9, 201-206.

大屋, 室田 (1982), Voronoi Diagram を求める算法とデータ構造の比較・検討, 日本OR学会1982年度春季研究発表会アブストラクト集, 2C-3, 185-186.

大屋, 伊理, 室田 (1982), Voronoi Diagram を求める算法の改良, 日本OR学会1982年度秋季研究発表会アブストラクト集, E-8, 152-153.

F.P. Preparata (1981), A new approach to planar point location, SIAM J. on Computing, 10, 3, 473-482.

F.P. Preparata and S.J. Hong (1977), Convex hulls of finite set of

- points in two or three dimensions, C. of ACM, 20, 2, 87-93.
- M.I. Shamos (1978), Computational Geometry, Yale Univ, Ph.D. Thesis.
- M.I. Shamos and D. Hoey (1975), Closest-point problems, Proc. 16th Annual IEEE Sympo. Foundations of Computer Science, 151-162.
- J. Sklansky (1972), Measuring concavity on a rectangular mosaic, IEEE Trans. Computers, C-21, 1355-1364.
- G.T. Toussaint (1980), Pattern recognition and geometrical complexity, 5th International Conference on Pattern Recognition, 1324-1347.
- G.T. Toussaint (1982), Computational geometric problems in pattern recognition, in J. Kittler, K.S. Fu, and L.F. Pau (eds.), Pattern Recognition Theory and Applications, D. Reidel Publishing Company 73-91.
- G.T. Toussaint, S.G. Akl and L.P. Pevroye (1978), Efficient convex hull algorithms for points in two and more dimensions, McGill Univ. Technical Report, SOCS-78.5.
- A.C. Yao (1981), A lower bound to finding convex hulls, JACM 28, 4, 780-787.
- 吉田 (1982), 伊理研究室合同輪講資料 (1982-06-22).